

熊野の
ホコから

怪野の熊

「旧・中辺路町の怪異(其の五)」



和歌山大学
システム工学部
環境システム学科
中島敦司教授



内井川は、のどかな山村だが、奥の夫婦滝には大蛇伝説が残る

旧・中辺路町の内井川には、夫婦滝(別名、観音滝)の大蛇の話が伝わる。江戸時代、徳川家光が將軍だった寛永の頃、和泉国の獵師が内井川に來り住んだ。ある日、獵師が夫婦滝の側で大猪を撃とうとすると、背後

で木の枝を折るような音がした。振り返ると若い娘がいた。このような山奥に若い娘が、と不審に思い、鉄砲のぞき穴からよく見ると娘は大蛇であった。獵師は、

其の(七)

非常用の念仏弾を仕込んで大蛇を撃った。たちまち山が鳴り、雲霧に閉ざされたが、獵師は命からがら家に戻った。しかし、そのまま病で寝込んでしまい、家人が訳を尋ねても何も答えなかつた。獵師は三年目に死んだが、今際に事の次第を語り、仕損じてはいないはずだ、三年たつたら滝へ行つてみるようにといひ残した。家人が滝へ行くと、手のひら程もある大きなうろこが三枚落ちていたので社寺に納めたという。



滝の多くは、たった1回の土石流によって岩盤が露出してできる。写真は、平成23年の災害の際「一夜」で新たに誕生した滝。まるで大蛇が這いずり回ってきた地形で、滝と蛇の関係が良く語られる理由もうなずける。

夫婦滝の大蛇の話は、他にもある。その昔、温川(ぬるみがわ)の南にある十国(じゅうこく)谷は人が寄りつかない寂しい谷だった。いつ頃からか万六という炭焼きが入り、仕事を始めた。万六がいつものように木を伐き、鉈(なた)を谷川で研いでいると、一人の娘が現われた。そして「自分は観音滝にいた者だが、主人が死んだので、こちらに逃れてきた」と言う。そして、万六が道具を研いだ水が自分には毒に

なるから、川に流さないようにと頼む。もしそうしてくるなら、自分は雨雲を呼べるので、水に困る事があつたら助けましょう、とも言った。万六は、その約束を守つて暮らした。何年か後、一帯を苦しめる大旱魃(かんばつ)が襲つた。万六は娘との約束を思い出し、滝に梵鐘(ぼんしよ)まで持ち込んで雨乞いを始めた。すると滝つぼを白蛇が泳ぎ出した。それを見た万六が「あの娘だ、雨が降る」と大声を出した途端に大雨が降り出したという。

夫婦滝のすぐ横には、小さな観音堂が祭られている。毎年一月の第三日曜日(本来は一月十五日)に地域の人たちが集まつて例大祭を催している。滝つぼにすみ着いている大蛇に餌を与えるかのように、祭りの参列者らがそれぞれ持ち寄つた生卵を滝つぼにかけて投入(お供え)するユニークな風習が今もなお続けられている。

中島敦司(なかしまあつし)教授プロフィール
昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗(妖怪、伝承)。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30〜50日は訪問し、研究する。

